



2015～16 年度
国際ロータリー会長

K. R. ラビンドラン

Weekly Report Niigata



2015～16 年度
新潟ロータリークラブ会長

竹石 松次



世界へのプレゼントになろう

2015～16 年度 国際ロータリーのテーマ

新潟 RC11 月第 3 例会 (2015.11.24) No.3111

(1) ロータリーソング「我らの生業」斉唱

(2) 竹石 松次 会長挨拶

岩田正巳

明治二十六年 (1893) ～昭和六十三年 (1988)

三条市 (旧南蒲原郡裏館村東裏館) の眼科医で漢詩をたしなう、屯 (たむろ)、悦 (いつ) の長男として誕生した。生まれた年が干支葵巳 (みずのとみ) であったことから正巳 (まさみ) と命名された。

父・屯は、幼少時から「太平記」などの軍記物を読み聞かせたほか、知人の画家との付き合いを通じて、絵の知識を長男に植え込んでいた。裏館尋常小学校、旧制県立三条中学校に学んだが、ここで、東京美術学校 (現東京藝術大学) を卒業し教師として赴任した秋保親美から、川端玉章の花鳥図などの絵を紹介され、絵描きになる決心をした。しかし、医者としての後継者を望んでいた両親から反対され、仙台の高校受験をするが不合格となり東京に行き、予備校に通うこととなった。上野の美術館に足を運ぶ一方、進路変更を決意し父屯を説得、遂に両親の許しを得ることに成功した。

この時に父を説得した「一世一代のタンカ」を自身が語っている。

「父は、私に、その天賦の才のないことを、かなり予知していたように思われます。腹の底からのような激しい声になり、

「何万人に一人の、道なのだ。野たれ死にしてもいいのか!!」と攻め込むように言いました。

「はい、たとえ野たれ死のうとも、仆れるまで、やります -

私は、ふるう心を押さえ、全身の力をふりしぼって、一世一代のタンカを切ったのです。すると、父は、急に声を落とし - ほんとうは、お前は、医者にさせたかった。それが、お父さんの本心なのだ - と、言ったのです。短い一言でした。」

理想主義者であった父・屯の許しを得て絵描きの道に進む事になった瞬間だった。

東京美術学校受験のために小石川の川端学校に通う一方、二松学舎で漢詩を学ぶこととなった。

大正二年 (1913)、正巳は、念願の東京美術学校に入学、教授の日本画家で大和絵の小堀鞆音 (ともと) と松岡映丘

(えいきゅう) に師事したことで伝統的な画法を会得することとなった。二年後の大正四年には、出品作品「残雪」が皇后宮職御用品に買い上げられ、その後、特待生になり一年間授業料を免除されるなど頭角を現すようになった。

伝統的な日本画である大和絵とは、平安期の国風文化の高まりの中で、中国から伝承された唐絵に対して、我が国独特の景色や人物を表現することを本旨とし、画風を展開しているが、正巳の画法は、それぞれのテーマに地域の風景を織り交ぜ人物や情景を表現している点において際立っていた。

松岡映久の画法を受け継ぐ「新興大和絵会」を大正十年に結成、風景画の共同制作「東都近郊十二景」「日本新名勝図絵」「現代風俗絵巻」、そして、夏目漱石の小説を題材とする「草枕絵巻」等、ユニークな創作を行っている。

やがて、帝展に出品した、昭和五年 (1930) の作品、高野山を取材した「高野草創」、弘法大師・空海が高野山開山を決めた経緯を表現した大作である。

また、昭和九年、奈良を旅して描いたもので、諸国を漫遊し、多くの和歌を残した西行法師の大和紀行を描いた「大和路の西行」、帝展出品の二作品は共に特選となった。

二作品とも主人公は丸顔で、気品に満ちたその姿、背景には正巳の円熟味を増す嚆矢となった作品である。そこには、「昔のものを描いても、生きたものをかきたい。」という信念を貫き、歴史画家としての意気が満ち溢れている。

やがて、太平洋戦争を契機に歴史上の人物・武者絵を題材にした「源平盛衰記」「平家物語」といった作品を創作、昭和十九年には妻の実家、加茂市に四年間疎開し、創作活動を続ける。昭和二十年後半には、平安時代や古代にテーマを求めた活動を行っている。この頃から、少女クラブや主婦の友、婦人倶楽部の装丁、挿絵にも取り組んでいる。

昭和三十年代に入ると、古代中国やシルクロードの石仏、傭、画像石の拓本などに加え、インドのアジャンタ壁画と言った世界にも挑戦するようになった。

「青夜」、二人の美人が燭台を手に語り合っている作品は、この頃描いた作品の中でも神秘的な静寂さを表現した品格を備えている。正巳の晩年は、再び花鳥画の世界に戻り数々の名品を生み出している。

「石ころはいくら磨いても玉にならない。しかし、石ころは石ころの玉にならないいいところがある。その石なりの姿、いまのままの姿で全力をあげてやるという心境に、一種の味を感じるようになりました。」

七十年の画業を振り返った心境を語っている。

昭和五十二年、日本芸術院会員、五十九年、三条市名誉市民に推挙されている。

昭和六十三年、東京世田谷の自宅で九十四歳の生涯を終える。

(3) 委員会報告

・小林 建社会奉仕副委員長より浪江町訪問

11/28の浪江町訪問の事前挨拶と下見のため、松本さん、小田さんと現地へと行って参りました。町長、副町長にご挨拶をさせて頂き、浪江RCの会長にも、当日のアテンドをお願いしてきました。浪江町役場から規制線の中に入り(国道は通行可ですが、町中は通行証がないと入れません)、中田帰町準備室長より案内頂きました。海岸沿いは津波の被害の爪痕がそのまま残る状況で、仙台市内では見られなくなった光景が眼前に広がります。町中も倒壊寸前の家屋が残り、時が止まったままでした。また、福島第1原発が遠方に見え、クレーンが立ち並ぶ様子も伺えます。あそこではまだ戦いが続いていると思うと感慨深いものがあります。訪問当日は参加者の方々の目で、復興の現状を写真に切り取ってもらえたらと思います。

・秋山博一 IA 委員より年末年始献血活動協賛金のお願い

(4) 各種ご寄付の発表

ロータリー財団寄付発表(織戸 潔委員長)

樋熊 紀雄君 徳山 啓聖君

岡村 健吉君

米山奨学会寄付発表(小林 敬直委員長)

徳永 昭輝君

(5) ニコニコボックス紹介

・浅田 龍一君 結婚記念日のお花をいただきありがとうございました。

・森井 満男君 昨日、無事に「障害者スポーツ体験会 in 新潟」が開催されパラリンピック出場者を迎え100名が集まり、大成功したことにニコニコです。ありがとうございました。

(6) 幹事報告(吉田 和弘幹事)

・ロータリー事務局は12月29日～1月3日お休みさせて頂きます。

(7) 卓話「ミャンマーの医療支援15年」

新潟大学名誉教授、新潟医療センター一部長

内藤 眞 氏



(8) 11月24日例会の出席率 72.34%

会員数98名(出席免除会員 8名)

出席者68名(出席免除会員4名を含む)

(2週間前メーク後 90.63%)

12月8日の例会予定

「浪江町訪問報告」 小田社会奉仕担当理事

新潟ロータリークラブホームページアドレス

<http://www.niigatarc.jp/>